
虚構ヒズミラクル

雛祭バペ彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚構ヒズミラクル

【Zコード】

N1767B

【作者名】

雛祭パペ彦

【あらすじ】

この小説は、400字詰め原稿用紙107枚ほどの小説です。長いです。

ヒズミラクル その1

水を汲み終えると、男はペットボトルの蓋を閉めた。容量は386ml。パッケージにそう印字してあるのだから間違いない。

花崗岩を加工して造られた水飲み場には、笑顔を浮かべた子供ゾウのイラストが描かれている。ゾウの長い鼻と蛇口の形状とを関連付けた「デザイン」なのだろう。それを単なるごじつけといつてしまえば、元も子もなくなってしまう。

ど、そんなことを考へて、男の姿が水飲み場から消えていた。つまらない事を考へて、見失ってしまったのだ。

男の姿を追うために、私は、辺りを見渡す。

古ぼけた遊具が点在しているここは小さな公園だった。こうしている間にも、あの男はどんどん遠くへ行ってしまうだろう。しかしここには水飲み場の他に、鍛ついだジャングルジムや、滑りの悪そなすべり台や、犬猫の公衆便所を兼ねた砂場があった。

ペットボトルの男、性別が男性のペットボトルではなく、ペットボトルを持つている男性は、すでに公園を出て大通りに向かつて歩いていた。あたりは住宅街で、多くの窓にはカーテンが閉じて掛けられている。人影はなく車の往来もない。唯一、遠くのほうでバイクのエンジンが間歇的な唸りをあげていた。

空を薄闇が覆っていることから、いまが明け方か暮れ時のことぢらなのかもわからない。バイクの音は新聞配達員によるものかもしれない。しかし朝刊配達なのか、夕刊配達のかはわからない。公園に据えつけられた背の高い丸時計が4時17分を示している。とはい、これだけでは現在が午前4時17分なのか午後4時17分なのかは断定できない。時計が、24進法のデジタル表示によるもの

であれば一目瞭然なのだが、行政の怠慢は、こうこう些細なところに現れるものだ。

ところで、一度ボトルをやつてしまつた私が、一度と男を見失わないようにするには、どうすればよいだろうか。そうだ、できるだけ近くにいれば良いのだ。並んで歩けばいい。

ということで、私は、男と並んで歩くことにした。

ペットボトルを片手に歩きながら、男はたいへんな悪臭を振りまいていた。甘くもあり酸っぱくもあり苦くもあり、腋臭の匂いであり、餒えた匂いだった。ヒゲも生え放題で、安い紅茶のような肌の色をしていた。これ以上ないというくらいの日焼けをしていることから、ホームレスであることは疑いようがない。しかし服装に目を移せば白いタキシードで盛装しているため、必ずしも住所不定の輩とはいえない。

もしかすると、パーティーの帰り道なのかもしれない。私はこのペットボトルを持った男のことを何も知らないので、外見から推測するしかなかつた。

たとえば男が着ているタキシードは白色なので、仮に結婚式ならばそれは新郎の服装だ。喜びのあまり昨夜は新婦に友人知人同僚たちを交えてドンチャン騒ぎをしたのかもしない。しかし、それにしても酒の匂いがせず、餒えた匂いばかりが男のまわりを漂つていた。それに鼻から下をおおう無精ヒゲなどは、とても一夜で成したものだとは思えない。私が想像するに、実は結婚式は10日前に催されたのであり、その夜騒いだと興奮しすぎた男は一種のトランス状態に陥つたため、例えば「うひょおおおつい」などと叫びながらわけもわからずホテルを飛び出したものの、気がついてみると知らない土地の公園のベンチで目を覚まし、どうやら喉が渇いていたので水飲み場で渴きを癒してから、ついでに転がつて空っぽのペットボトルに水を汲んだ、という経緯を踏まえたうえで現在に至

るのかもしない。伸び放題のヒゲも、餽えた体臭も、10日間ほどトランസしていなうなら説明がつく。あくまでも勝手で自由ままな想像だが、とりあえずそう結論づけたあと、私は、隣りに誰もいないことに気付いた。

並んで歩いていたにもかかわらず、また見失ってしまったのだ。

私があわてて辺りを見渡すと、さいわい、すぐに白いタキシード姿を見つけることができた。なんと、ペットボトルの男は、私の数メートル後ろを歩いていたのだ。どうやら私は、知らないうちに男のことを追い越してしまったらしい。

もう一度と男の姿を見失わないためには、私は自分の考えに没頭する行為、いわば「よそ見」を控えなければならない。内省するなどもつてのほかだ。私は、私の役割を果たさなければならない。というわけで私は、進路に立ち塞がる形でもつて男と顔を突き合わせて歩くことにした。これで一度と男の姿を見失うことないだろ。

あいかわらず、明け方なのが暮れ時なのかハツキリしない暗い空の下、ペットボトル片手のタキシード男は私の目の前を歩いている。アスファルトの舗道をゆっくりとした足取りで進んでいた。

周りに通行人の気配は無かつた。時折、4トントラックや小型のコンテナトラックが傍を通り過ぎていったが、そんなものに気を取られることなく、なるべく私は、目の前にいる男のことだけを考えるようになっていた。

ところで、このホームレスと思しき男が白のタキシードを着ているという不可解について、いくら考えても仕方がなかつた。目の前にいる大丈夫。そもそも、この男が何者であろうと私には関係がない。まだ目の前にいる大丈夫。偶然、たまたま、ひょんなことから出会つたのがこの男だったのであり、これからずっとこの男に尾いて歩くわけではなかつた。まだ目の前にいる大丈夫。だが、そうし

て出会い、私の目の前にいる以上は、私はこの男のことにについて何かを考え、そして語らなければならなかつた。まだ目の前にいる大丈夫。

べつに尾行しているわけではない。私は探偵ではないし、諜報組織の一員でもないからだ。

それを証明するために、私は自動ドアをくぐり、蛍光灯が目映い店内に足を踏み入れた。

まず目に入ったのは、堆く積み上げられた扁平なカゴだつた。灰色のものは10段ほど積まれており、これがもし跳び箱であれば小学生が跳び越えるのは難しいだろう。そのほかの白色や青色のカゴは、3箇所にそれぞれ低く積んである。言うまでもなく、これらは跳び箱ではない。

その青年は、どの青年かといつゝことはこのあと説明するが、なにか携帯電話をひとまわり大きくしたような機器を片手に、カゴの中から次々と品物を取り出していた。品物とは、包装された弁当や惣菜パンの類であり、それらにいちいち機器を押し当てては、そばにある棚に並べていく。押し当てるたびに「ピッ」という電子音が鳴る。おそらくこの青年は従業員で、入荷した商品を並べているのだ。緑色と黄色を組み合わせたデザインの制服を着ていることから見ても間違いない。ここは大通り沿いにあるコンビニエンスストアだつた。

私は店内を見渡したが、青年のほかに人の姿はなかつた。にもかかわらず、さきほどから人の声がするのはなぜだらうか。若い女が得意げな調子で喋っているのだ。

「未成年者の飲酒・喫煙・強盗は法律により禁じられています。当店でタバコ・アルコール類をご購入する場合、身分証の提示をしていただく場合がありますので、どうぞご了承ください」

その女の声は、居丈高な調子でどこからともなく聞こえてきた。一度ほど同じ文言を繰り返したあと、今度は歌詞のないBGMが聞こえてきた。文言の内容はコンビニ運営に関するものだったので、間違いなく女はこの店の従業員なのだろう。せつとどこかに身を潜めていたはずだった。

ヒズミラクル その2

青年は、あいかわらず棚に並べる作業を続けていた。さきほどの中の声の主は、いつこうに姿をあらわさない。それでも、青年は平気な顔で弁当や惣菜パンを手際よく並べていた。よく整った顔立ちは怒りに歪むこともなく、手伝いに来ない怠惰な女性従業員のことなど露ほども気にしていないように見えた。

時計は4時33分を示している。表示が長針と短針だけのものなので、それだけでは午前なのか午後のかはわからない。しかし、レジカウンターに積まれている、荷解きがされていない届けられたばかりの新聞紙の束は、5紙ともに「朝刊」と印刷されているので、現在は「午前」4時33分に違いなかつた。朝刊の日付は、すべて18月46日（炎）となっていた。

あの青年がこのコンビニの従業員である以上、すこしうらい目を離したところで、この狭い店内からいなくなることはないだろうから、私は安心して新聞に目を通すことができる。これらを発行している新聞社が、それぞれ左右どちらに傾いているのか、私には見当もつかない。もちろん、本社ビルの地盤沈下による傾きという意味ではない。

ある新聞の第一面では、これまで謎とされていた「しゃつくりのメカニズム」が完全解明されたことを大きく報じていた。呼吸器医学と神経病理学の共同研究チームが33年の歳月をかけて解明したようだ。お天気欄に目を移せば、どうやら今日の午前中から雨が降るらしい。予報は100%となっていた。つぎに政治欄と社会欄をすっとばして、文化欄には連載小説が掲載されている。『じろっちはぱふぱふ』という奇妙な題の時代小説だった。ちょうど、男の町人と女の武家が入水心中をするシーンが描かれている。最後に、テレビ欄の裏側にある4コマ漫画『物乞いサツちゃん』を3度繰り返して読んでから、新聞を元に戻した。どうしても4コマのオチが

よくわからなかつた。

青年は、引き続き作業を行つていた。灰色のカゴの高さは半分に減つている。空っぽになつたカゴは、別の場所によけてあつた。

それにも、さきほどの居丈高な女は、まだ手伝いに出て来ないつもりなのだろうか。いずれにしろ、作業はまだまだ終わらないだろう。青年には氣の毒だが、私は雑誌を立ち読みすることにした。雑誌コーナーは道路沿いに面していて、ウインドウガラスを通して外が見渡せる。ときおり、運送トラックが通り過ぎて、道路向こうには大きなレンタルビデオ店が構えていた。営業時間は、年中無休で10時から24時と説明されており、今はまだ閉まつてこる。このことからも、やはり今は早朝なのだ。とすれば、そろそろ空が白みはじめても良い頃なのだが、午前中から雨が降るせいなのか、薄暗いままだつた。

4段ほどのマガジンラックには、さまざま雑誌が陳列されていた。しかし、そのどれもがビニール紐によつて十字に縛られている。おそらく、たぶん、私が思うにこれは利用客が持ち運びやすいようにという店側の配慮なのだろう。紐が交わるとこを指でつまむようにして持てば、少ない労力でレジまで運ぶことができる。

バタン

という音が私の耳に入った。雑誌コーナーの突き当たりにあるドアが閉まつたようだ。店内を見渡すと、灰色カゴの周辺に青年の姿はなかつた。店内に客は一人もいなかつたのだから、つまりあのドアの向こうにいるのは青年であり、まさに青年はズボンの前ファスナーを下ろしているところだつた。

和式便器がある一畳ほどの空間には5センチ四方の緑色のタイルが敷き詰められている。そして、転び出した青年の陰茎の亀頭の最先端からは濃い琥珀色の液体がほとばしり、和式便器内の水溜りがジョボジョボと威勢のよい音をたてて泡立つた。青年の短く切りそ

ろえられた黒髪からは蒸れた汗の匂いがしたが、それよりもトイレ芳香剤の匂いが強く、とつぜん追い討ちをかけるように甘じょっぱいような尿の臭いが漂いはじめたところで青年は水を流した。

それから青年は右手でトイレのドアを押し開き、さらに店内への

ドアを抜けると、レジカウンターの中に1人の男が立っていた。

その男は、肩幅が広く肥満体で、紺色のジャージを着ていた。この店の制服を着ていないことから見て店員ではなさそうだし、すでにカウンター内に侵入していることから盗だとは思えない。何者だらうか。

単純に考えればコンビニ強「おつかれー」盗かと思ったが、どうやら違「あ、おなまーす」ったようだ。挨拶の言葉を正しく発音したのはレジ内の肥満体ジャージの方だった。

「今日、ちょっと多いね」

「あー、きのう発売になりました」

「いいよ気にしなくても。でも雨降るんだよなあ」

「えー、本topular」

「しかも、予報は100%オレンジジュース果肉入り

「うわ、suvyいつすよ袖は」

「さぶいつて言うなよ」

「んじや、続きやdeますんday

「そうだね。僕も手伝うから」

舌足らずな青年の口元をよく見ると、門歯の上下3本が無かつた。目鼻立ちちは整っているのに、せっかくの男前が台無しだった。青年の過去に、いつたい何があつたというのだろうか。

さつそく肥満体の男がレジカウンターから出て、弁当などを棚に並べはじめる。青年が持っている電子機器と同じものを携えて、手馴れた様子だつた。そばで作業を行つている青年と比べてみれば、どうやら肥満体の方が上級者ようだ。2人は、菓子パンや弁当の棚が並ぶL字通路で向かい合つている。

「最近、ちゃんと大学行ってんのか」

「あー、うー、ten長ひでー」

ten長と呼ばれた肥満体は、うすら笑いを浮かべながら、すでに灰色カゴを一つ空にしていた。口を動かしながらも、その3倍の速度で作業を進めている。肥満体ことten長の髪は中央分けのサラサラヘアーなのだが、頭頂部からは地肌が透けて見えた。早くも、のり塩風味の汗の臭いがその巨体から漂いはじめている。

そのとき、4時52分から53分になる瞬間を、私は見た。つまり長針がわずかにブレる瞬間を叩撃したのだが、まあそんなことはどうでもよい。ten長が私にひと足おくれて、店内の壁掛け時計に手をやつた。

「弁当のカゴ終わったら、もう上がつてもいいから

「hereい」

聞き取りにくい返事をしたあと、唇を堅く結び表情をまったく変えないまま、歯抜けの青年は、残り2個の弁当を棚に並べ終えた。これで10段あつた灰色のカゴはすべて空になつた。残るはten長の周りにある青や白色のカゴだけだ。

「じゃ、おふくろさまでした」

確かにそう聞こえた。

「うん、おつかれー」

作業に向かいながら返事をした肥満体は、笑みこそ浮かべていたものの、そのなかに青年の言葉に対するおかしみは含まれていなかつた。おそらく、ten長は青年が用いる歯抜け語を完全にマスターしているのだ。青年がここに勤めはじめてからだいぶ経っていることが推測できる。1年くらいだろうか。

青年が向かつた先は、カウンター奥にある4畳ほどの小部屋だった。制服を脱ぎながら、いったんはタイムカードを手にとつたが、すぐに戻した。タイムスタンプ機の時計が4時59分を示していることと何か関連があるのかもしれない。いずれにしても、この店のルールを私は知らない。それから、ふたたび青年がタイムカードを手に取つたあと機械に通すと「極楽純太」と記されたカードに退勤

時間が刻まれた。

極楽青年もしくは純太青年は、脱いだ制服をロッカーに納めると、片手で携帯電話を操作し始めた。切れ長の目が、ぢつと小さな画面を見つめている。椅子に腰掛けて、縦横無尽に文字を入力していた。そばでは、薄闇のなかでぼおっとPCディスプレイが発光している。他にも四つの小さなテレビモニターが積んであり、そこには店内の断片的な映像があった。おそらく防犯カメラによるものだろう。

この窓のない物置じみた部屋は、従業員たちの休憩室を兼ねているらしい。室内灯をつければよいと思うが、青年はいつも、発光する携帯電話の画面から顔をあげる素振りを見せない。

その足元には、買い物カゴが2つ置いてある。どちらも山盛りいっぉいに弁当や惣菜パン他が放りこんであった。見るからに無造作で、サンドイッチの上にいくつも牛乳パックが置かれていて、具のエッグペーストがパンとパンの間からパンパンに押し出されて見映えが悪い。フルーツと生クリームがデコレートされたプリン製品にいたっては、天地が逆さまに放り込んであった。

しかし、特筆すべきはその粗雑な扱いよりも量だった。カゴ大盛り2杯分の食べ物＆飲み物、すなわち、おにぎり、弁当、焼そば、惣菜パン、菓子パン、ホワイトグラタン、パック入り鶏の唐揚げ、ちくわ、果物ゼリー、プリン、1リットル牛乳パック、フルーツヨーグルト3連などのオードブルからメインディッシュ、そしてデザートに至るまでの膨大なフルコースメニューを、この青年は一体どうしようというのだろうか 決まっている。買い物カゴに入れてあるのだから、当然購入するに決まっている。購入するつもりのないものを買い物カゴに入れるはずがない。ましてや、本来店頭に出しておくべきものを長いあいだ常温の場所に放置しておいたわけであり、いまさら元の棚に戻すわけにはいかないだろう。問題は、なぜこの青年が到底ひとりでは食べきれないであろうカゴ大盛り2杯分の食品類を購入する必要があるのかということだが、これは宿無しじみた男が白いタキシードを着ていたことよりも難解を極める問

題といつてもよい。

ヒズミラクル その3

まず考えられるのは、青年が大家族の一員であるという仮説だ。

現在、午前5時3分。青年が帰宅する頃には、世間の人々が目覚めはじめ、朝食を摂り始める時間帯が訪れる。あらためてカゴの中身を見ると、おにぎりやパンなど主食にあたる製品が多い。これはつまり、青年が属するであろうと仮定される大家族の朝食の大部分が、コンビニ食によつて賄われていることが推測できる。もしや、青年の両親もしくは母親は急逝しているのではないか。食事を用意する者が不在であるから、腹をすかせた兄弟姉妹のために、大家族の一員たる青年はカゴ大盛り2杯分ものコンビニ食を購入する必要があるのではないか。いや、この青年に兄や姉がいるならばその者たちが用意するだろう。ということはつまり、自分では炊事をすることのできない幼い弟妹たちを抱えているというなんとも不幸な話、などと勝手に決めつけてしまうのは拙速というものだろう。それではもう一つの可能性として、実はこの青年が大勢の哀れな野良猫たちをひそかに養っているという、いかにも6才児の読み物めいたお涙頂戴ストーリーが考えられるが、どこここまで考えを巡らせたあと、私は重大な過ちを犯していることに気がつき、慌てて我に返つたときには青年の姿が消えていた。

PCディスプレイと防犯モニタだけがぼおつと発光しており、4畳ほどの室内には誰の姿もなかつた。

またしても、私は見失つてしまつたのだ。
言つまでもなく「よそ見」をしたせいだつた。

空っぽの休憩室を出ると、白色のカゴをひとつだけ残してten長は作業を続けていた。遠く離れていても頭頂部の薄らハゲが確認できる件については置くとして、青年はどこへ行つてしまつたのか。

なに、慌てる必要はないのだ。落ち着け、いや、落ち着くまでもなかつた。あの歯抜けの青年がどこへ行こうが水虫だらうが性病だらうが私には関係ない。私は、ただ目の前にあるものについてのみ語つていればよいのだ。私は私の役割を果たせばよい。

といふことで、いま田の前にいるのは、私の目の前にいるのは ten長こと肥満体、肥満体ことten長だつた。濃紺のジャージに包まれた醜く大きな尻を突き出してしゃがんでいる。機器を片手にテキパキと菓子パンを棚に並べていた。

実をいうと、ten長はメガネをかけている。ノンフレームタイプのものだ。この重要な特徴を今さらのように付け加えたのは、私が語り忘れていたからだつた。はじめてten長を目にしたときから、メガネをかけている肥満の中年男性だということはわかつていたのだが、うつかり言及し損ねたのだ。断じて、思いつきや気まぐれによる後付けの設定ではない。私はそんなことはしないし、私の役割上、そんなことはできないのだ。肥満体のten長は、はじめからノンフレームのメガネをかけていた。それは搖るぎょうのない事実だつた。

丸鼻の下に浮きでた汗をジャージの袖でぬぐいながら、ten長は最後の菓子パン クリームメロンパン4つを棚に収め終えた。それからすぐに立ち上ると、空になつた青・白・灰色のカゴを、キャスター台に積み上げていく。そしていちばん背の高い灰色カゴの便を、おそるおそる床に滑らせる。店の入り口まで行けば自動ドアが左右にわかれ、店内のマットと店外のマットの間にある溝に気をつけながら、カゴが崩れ落ちないように十分注意を払いつつ、およそ10メートル弱ある駐車場を横切つたあと、店舗側面にあるカゴ置き場に納めた。

空は、くすんだ雲に覆われながらも少しづつ明るさを増していく、などといふ氣象予報士の前口上めいた説明はさておき、雑誌コーナーのウインドウ越しに時計を見ると、5時14分を指していた。運輸トラックに混じり、一般乗用車もちらほらと道路に現れ始めてい

る。

落ちていた自店の買い物袋を拾いながら *ten* 長は店内に戻ると、今度は青力ゴの便を運びはじめた。どうやら、このあと何度も同じ作業が繰り返されるのは明白であり、私は *ten* 長について歩くのを止め、とりあえず店内で待機する。

「未成年者の飲酒・喫煙・強盗は法律により禁じられ」
急に BGM が止み、ふたたびあの女従業員の声がどこからともなく聞こえてきた。相変わらず人を上から見下したような口調であり、私は咄嗟に休憩室へ向かった。女が隠れているとすれば、あの部屋以外にないとthoughtのだ。

「バコ・アルコール類を」「購」

ふたたび、私は物置じみた休憩室に足を踏み入れる。

PC ディスプレイが放つわずかな光では隅々まで見渡せない。室内灯のスイッチを探したのち、それをすぐに見つけたのだが、私はどうすることもできない。OFF になつているものを ON にすればよいのだが、それは私の役割ではない。ただ OFF になつている、と言つことしかできなかつた。

「みうん証のてい示をいていたあく場あいなりますおで」

ドア一枚を隔ててているため、あの女従業員の声がくぐもつて聞こえる。休憩室の中は静かだ。もしこの部屋のどこかに隠れているとすれば、声くらいは漏れ聞こえてくるはずだが、誰かが潜んでいる気配すらない。と、すれば、残るは天井裏しかないだろうと思い、私は天井を見上げた。しかし、どこにも継ぎ目は見当たらぬ。そもそも天井裏などあるのだろうか。この店の外観はどんなだつたか

ドアが開き、休憩室に光が差し込んだ。

ten 長だった。周りに聞こえるほどの鼻息を漏らしている。紺色のジャージ姿で、ドアをくぐる時に頭を屈めたのだから 180 センチ以上はあるのだろう。いちおう言つておくが、横幅ではなく身長の話をしている。その *ten* 長が壁に手を這わせると、ようやく室内が蛍光灯の明りによつて照らし出された。あつとう間に、の

り塩風味が部屋のなかに充満する。いつのまにかタバスコのような酸味も加わっていた。

鼻息とも溜め息ともつかないような呼吸を繰り返しながら、ten長はP.Cそばの椅子に腰掛ける。椅子は、キヤスターが付いていたナイロン張りのもので、ten長の全体重が加わった瞬間、生きた鶏を3匹まとめてツブした時のような悲鳴をあげた。

太つているためなのか足を組むことができず、妙に行儀よく2本の脚を揃えたままten長はくつろぐ。そばにあつたタオルに手を伸ばしては顔や首まわりの汗を拭いていた。それから腕時計を眺め、おもむろに立ち上がるかと思いきや、ten長は足元にあつた大盛りのカゴに手を突っ込んだ。おにぎりと惣菜パンが驚づかみにされる。

このとき私は、青年の歯抜け面を思い浮かべたが、何の躊躇もなく包装を破りはじめるten長を田の前にして、ようやく合点がいつた。

件の大盛りカゴ2杯は、すべてten長の朝食だったのだ。

それを証明するかのように、焼そばとコロッケが挟まれていた惣菜パンを、ten長はたつたの4口で平らげてしまった。そして新たに食卓に乗せられた牛乳1リットルパックを直飲みしながら、フガフガムームクチャクチャと『北海道イクラ』と表示された三角おにぎりも頬張りはじめる。牛乳と米粒とイクラの粒が口のなかで混ざり合っている間に、ten長は弁当にも手を伸ばす。ただちに包装を剥きはじめると思いきや、椅子から立ち上がり、その弁当を小脇に抱えて店内へと戻っていく。

慣れた手つきで、包装に添えられていたソースの小袋を取り外すと『三陸海鮮フライ弁当』を電子レンジで温める。40秒からはじまり1秒ずつカウントダウンしていく。39、38、37、36、35、34・・・・こんなことまでいちいち見守る必要はない。

待っている間、tēn長は腰に両手をあてて、舌で口の中のお掃除をしながら外を眺めた。

自動ドア越しに見える駐車場のアスファルトの表面が斑模様になつていた。店を囲むウインドウガラスを注視すると、わずかな水滴も見られる。

tēn長はカウンターを出て、駐車場へ向かつ。自動ドアが左右にわかれた瞬間、パラサラパラサラという雨粒の音が聞こえた。小さな雨粒に混じつて、ときおりボトッという大きな雨粒がウインドウガラスを叩く。そこへ紫色の乗用車が1台やってきて、フロントバンパーを車止めにあわせて停まつた。運転席には、なんと歯抜けの青年が乗つているではないか。

電子レンジがチンッという音をたてて、青年は車から降りた。

ヒズミラクル その4

「おなされす」

降りかかる雨粒を気にしながら、青年が店内に足を踏み入れる。

「忘れものしづかた」

これは一大事かもしないと私は息を呑んだ。そら見たことが、青年は幼い弟妹たちの朝食もしくは大勢の可哀相な野良猫たちの工サを取りに来たのだ。やはりあのカゴ2杯分の食糧は青年のものなのか。しかし、すでにten長は、惣菜パンとイクラおにぎりと牛乳を貪り食つてしまっている・・・人の物・・・窃盗・・・刑務所・・・拷問・・・絞首台・・・私は思わず最悪の事態を連想してしまう。

食いしん坊さぞや気まずいだろうかと思いきや、臆する様子もなく堂々と電子レンジから弁当を取り出していた。こもつていた調理油の臭いが辺りに放たれる。

一方の休憩室では、ロツカーを開けて、青年が中から黒っぽい何かを取り出していた。次に、それを素早くジーンズのポケットにしまった。それが一体何であるかは想像がつくが、はつきりと見たわけではないので言わずにおく。たぶんアレだろ。

「i-t'sも忘れ'reootsよ」

そう言つて含羞みながら、青年はすうすうとレジカウンターを抜けて店の外へ向かう。

「soldier」

「うん。おつかれー」

この和やかさは何だ。一体どういうことなのか。

休憩室に並べられていた包装紙の残骸や開封済みの牛乳パック、そして今まさにten長が手にしている温められた弁当が視界に入らないはずはないのだが、それらについて歯抜けの青年は何も言わずに店を出て、車に乗り込んだ。ということはつまり、あの買い物

力ゴ2杯分という膨大な量の食べ物は、どうやらten長の朝ごはんであるということで間違いないのか。1食であれだけの量を消費していれば、なるほど太るはずだ。しかしいくら何でも食べすぎだとと思うので、腸内を悪質な寄生虫に冒されている可能性も捨てきれないが、私がten長にそれを告知する術はなかつた。

歯抜けの運転する車が、バックし始めていた。私はそのあとを追う。

歯抜けの青年は、ルームミラーとサイドミラーを交互に覗きこみながら方向転換すると、コンビニの駐車場から車道へと発進した。エンジンが唸りをあげるとともに速度計の針が右方向に傾き続け、時速50キロの辺りで行ったり来たりを繰り返すようになった。個人宅や商店、ビル、アパートなどの風景が青年の進行方向とは逆に流れしていく。それは建物や樹木が液状化して流れているのではなく、単にそれぞれの地点を通り過ぎたという意味だ。

車内には座席が3つあった。運転席と助手席、そして車幅いっぱいの後部座席。厳密にいえば、1番後ろに置1枚にも満たない空間があるが、座席と呼べる代物ではない。

後部座席の足元には、丸めたティーシューや空のペットボトル、それに表紙の破れたマンガ雑誌がいくつも転がっている。いくらでも足で踏めるが、こういう状態を足の踏み場がないと言つのだらう。もう一度言つが、どれだけ散らかつていよつとも、足で踏もうと思えばどれだけでも踏める。

停車した。

フロントガラス越しに赤信号が見える。ワイヤーは忙しく反復運動を繰り返し、アスファルトの表面に無数の波紋が広がっているほどに雨量は増していた。

いま、交差点の南側に青年の車は停まっている。ナンバープレートは黄色く、マフラーからは白い煙があがっていた。防寒衣類のマ

フラーが燃えているのではない、ガスを排出しているのだ。

交差点の北西にある場所にはファミリーレストランが店を構えていた。ピンク地に黒文字が際立つ品のない看板に書いてある文字列が店名なのだろう。24四時間営業で年中無休とも示してあり、看板に偽りなく窓際の席で若者数名が大口を開けて笑っていた。いまの時刻は 運転席にいる青年は腕時計をしていないのでわからぬ。携帯電話も見当たらず、シフトレバーのそばにある小さな液晶ディスプレイは、読み取りにくいアルファベットを表示しているだけだった。いまは、何時何分なのか。

5時17分。

私は、テーブルの上に置かれた携帯電話の画面によつて現在时刻を知ることができた。

木目調のテーブルの上には大小様々な食器が並んでいて、肉や野菜、米飯などが盛り付けてあつた。それらを男と女と男と男と女が囲んでいる。

窓の外を見やれば、くすんだ紫色の塗装を施された軽四自動車が、いままさに交差点を通過しようとしていた。

「でもやっぱりあれしかないと思」「まあそうかも知れないけど、あれじゃちょっと「そういうえば落研は串揚げやるつて聞いたけど「なんで落語をやらないんだよ「知らん」「なんか関西に行くとソースの2度漬け禁止とかって言うよね」「なにそれ?」「え、と、だからあつちの方じゃあ、串揚げにソースをかけるんじやなくて、カウンターにあるソース壺に直接串揚げを浸して食べるらしくて」「ソース壺、なんじやそら「そのままだろ「生まれてこのかたそんなもん見たこない」「生まれてこのかたつて、おまえはいつの「あー、なんか串揚げ食いたくなつてきた」「注文すれば?」「自分らでやれば串揚げ食い放題だな」「ソースの2度漬けは禁止」「いや、俺らがやる時は、あえて禁止しない」「なんでだよ「知らん」「ばかな」「そういうえばソース

壺つて1人につき1個なのか？ いちいち捨てて入れ替えるのが面倒く「いや、みんなで1つの壺を使い回すらしい」「なんか汚いな」「だから汚くならないための2度漬け禁止ルールなわけだ」「いや、あえて禁止しない」「だからなんでだよ」「知らん」「またそれか」「さすが関西人はエコロジスト揃いだな」「ケチなだけだろ」「関西＝ケチ」という図式は前世紀の遺物だよ明智くん「誰だよ明智くんって」「知らん」「何の話してんだよ、俺らは……」

5人も若い。それだけなら見ればわかる。しかし彼らの名前まではわからない。職業も年齢も住所もそれぞれの関係も、何もかも私は知らない。知っているはずがない、私はエスパーではない。だが目の前にいる以上、私は彼らについて何かを語らなければならなかつた。

ひと抱えほどあるテーブルの両側にはナイロン張りのソファーがあり、彼ら男と女と男と女が座っていた。ワイングラスに向かつて左側に男3人、右側に女が2人。律儀に席を分けているからといって、この若者たちが淫らな関係でないと誰が言い切れるだろうか、誰も言い切れない。性行為というものは10歳の男児と女児の間でさえも成立し得るのだから　まあそんなことはどうでもよい。

2人いるうち髪の長い女が、アイスクリームの入ったグラスにスプーンを抜き差ししている。その隣りにも全く同じアイスクリームのメニューを食べている髪の長い女がいて、ややこしいことに、この2人の髪の長さは同じくらいだった。髪の色も同じく黒い。では容姿ならどうかと思いきや、残念ながらどちらも醜い。美しければ「まるで　のように美しい」というふうに2人のことを区別できるのだが、醜いのだからどうしようもない。反吐と糞はどちらに勝るとも劣らず汚いというより、汚いものの醜いものの差異は表現しづらい。

というわけで長髪と容姿以外の部分で特徴づけなければならないのだが、私にとって女性の服装など、どれも同じものにしか見えない

かつた。そもそもこの醜い長髪の女たちが身に着けている服装の正しい名称がわからない。とりあえず、2人とも長袖の上着と、短いスカートを穿いていた。長袖の方はこれまた似通つた色とデザインのものだが、幸いなことにスカートの色が違う。窓際に座っている女は黒1色。もう1人は、黒と白と淡いピンク色のチェック柄を穿いていた。

次に男3人だが、相変わらず益体もないことを喋り続けている。いま現在も男3人女2人のあいだで会話がなされているわけだが、いちいちその内容にまでは言及せずにおく。私にとって、この3人の男たちの特徴を語るほうが優先事項なのだ。

窓際に座っている若者が身に着けている服装の名称もよくわからぬ。原材料は何らかの纖維なのだろうが、とりあえず『YORO MEKI』という白地にオレンジ色のプリントがしてあるトレーナーの一種と見られるものを着ていた。

次に男性陣の中央に座っている若い男の特徴だが 面倒くさいので、窓際から順に「A助」「B助」「C助」と呼ぶことにしよう。もちろんこの若者たち1人1人には歴とした姓があるに違いないのだが、どうせ名も無き平民にすぎないのでから、没個性的な記号として扱つても構わないに違いないと決めつけることとする。

ところでB助は、A助とC助の間に座つていて、さきほどから机の下に隠れた左手で、自らの股間を揉みしだいていた。このB助という若者は、色褪せした藍色のソフトジーンズを穿いているのだが、指先の位置を鑑みると、どうやら睾丸の裏側あたりを懸命に揉みしだいているらしい。正面に若い女が2人いる現在の状況下において、ともすれば重大なる誤解を生みかねない行為であることをB助自身が自覚しているかどうかは私の知るところではないが、ともかくB助はひたすら自らの睾丸をジーンズ越しに揉みしだいていた。

残りのC助は、通路沿いの席に座っているわけだが、ずばり言ってこの男は歯槽膿漏だと思う。その吐息が度を越えて臭いからだ。己れの口腔内疾患を知つてか知らずか、C助の目の前にはキムチや

餃子、ホットコーヒーというよつたな香りの強いメニューばかりが並んでいる。

私は、他の4人の若者たちが、C助の香ばしい口臭について内心どう思つていいのだろうかと気になつた。私は神でもエスパーでもないので、彼らの心を読み取ることは出来ない。しかし、会話中の彼らの表情や視線をちつと観察することで、少しくらいなら読み取れるかもしれないと思つた。

注目すべきは、C助の隣りに座るB助と、正面に座るチェック柄スカートの女だろう。この2人は、C助の口臭半径内にすっぽりと収まっている。いわば歯槽膿漏の被曝者だ。

以降しばらく、B助およびC助とチェック柄の女 便宜上、
子とする これら3名の発言や表情に、特に注意を払つてみる。

「我々えー、トイレット研究会としてわあ　　」

「ふは、ふひやふ」

B助が吹き出し笑いをした。A助がおどけて見せたせいだらう。今のところ、右隣に座るC助の口臭に対する不快感など微塵も見られない。

「去年と同じでいいんじやない？　えつと、ほら《我が街のトイレ100選》だつけ？」

C助の正面に座る　子が言つた。溶けたバニラアイスが、パフェグラスの底に1センチほど溜まつてゐる。スプーンの柄はグラスの高さ以上に長く、それを掬い取ろうと思えば出来るようだ。しかし子は白く濁つた液体を徒らにかき回すだけで、決して掬つて口に入れようとはしないでいた。単なる見栄か、はたまた最後に一気呑みするための伏線か。いずれにせよ、正面に座るC助の口臭に対するリアクションは見られなかつた。

「だけど《トイレ100選》なんて、俺たちトイレフリークスの二ユーハイジからしたら、何の意味もないと思つぜ。あんなもん、飲食店とか小売店のトイレ写真を撮つて、古い汚い臭いとかのキャプションをつけるだけだろ？　あんなのより、思い切つて俺たちが今やつてることを発表すりやあいいだろ」

ようやく口臭魔人ことC助が発言した。キムチを咀嚼しながらだつたので、半径1メートルの範囲に、ニンニクやニラ、そのほか香辛料の強烈な臭いが広がつた。歯槽膿漏による酸っぱい腐つたような臭いは、キムチのおかげで気にならない。

そしてどうやらC助の発言は過激な内容を含んでいたらしく、他の4人が一斉に顔を向けた　ここで私は見逃さない。早くも隣りに座つているB助の様子が不自然だつた。わずかながら眉間に皺が寄り、唇をややきつと閉じていた。その様子は、呼吸するのを躊躇

つているかのように見えた。はたしてB助は、キムチ臭に辟易としているのか、はたまた口臭のほうなのか。

「わたしたちのやつてることを発表するのはヤバイと思つ・・・・・

・
喉を押し殺したような声で、窓際に座る黒ニースカの女、すなわち 子が言つた。

「なんで？」

即座にC助が言い返す。テーブルを見れば、キムチの小皿は空っぽで、目に沁みるような朱色の液体と白菜屑が残っている。実際、キムチの汁を眼に注ぎ込めば、やはり沁みて痛いだろう。

そばには餃子を盛り付けた橢円形の平皿があつたが、それにもわずか2切れしか残つていない。C助は箸で餃子をつまみあげると、キムチの残滓に浸して、それを、ひと口で頬張つてみせた。一見、行儀悪く見えるが、C助にとつてこれは必然的な行為だつた。もうそろそろ、C助の尊厳のために詳しく説明するのはよそう。

「みいじやん。ねんぶ発泡しちまおうで。まぶん、この先、10年は語り継ガレネフことになると思うよ、俺の予想では」

餃子を頬張つているのでCの発音は聞き取りにくい。A助やB助や 子や 子は、突発性の発語障害にかかつたかのように二の句をつげないでいた。あきらかに、C以外の全員が戸惑つてている。これは果たして、C助の発言内容に対してものか、それともC助のおぞましい口臭に対してなのか、もう少し見守らなければ判別できない。「俺らがあんなことやってるってバレたらヤバイに決まってるだろ。退学・・・・・下手したら、高いコンクリート塀プラス有刺鉄線の向こう側へと引越すことに」

C助のいる方へと身を乗り出して、窓際のA助が小声で囁いてみせる。なんとも意味深な発言だ。あいだに挟まれたB助は苦々しい笑みを浮かべながら、同意するように頷いている。この様子から見て、男性陣の順列は『C助=A助=B助』なのではないかと私は思つた。C助とA助は親しく、B助はその関係から少し距離があると

いう感じだらう。

『退学』『高いコンクリート塀の向こう側へ引越しのサカイ』この2つのキーワードがほのめかすものは『不祥事』や『犯罪行為』にほぼ間違いないと思う。『退学』という言葉からは、彼・彼女らが学生 外見から察するに18歳以上だと思うが、必ずしも大学生だとは限らない。高校3年生かもしれないし、短大生かもしれないし、専門学校生かもしれないし、はたまたフリーター、でんぐり返つて無職なかもしない。なにせ私は彼らの詳しい来歴を知らない。たとえ『退学』というキーワードが『大学籍からの追放』を指し示していたとしても、ここにいる5人全員が大学生であるとは限らない。なぜなら、私が耳にした限り、これまでに自らが大学生であることの証明するような言葉を発したのはA助、C助、そして子だけだからだ。子もトイレ研究とやらに携わっているかのような発言をしたもの、それはトイレ研究会の一員であることを辛うじて示すものであって、大学生としての身分を断定できるものはなかつた。モグリといふことも考えられる。B助においては、笑い声しか発していないので、その身分はもとより、トイレ研究会の一員であるかどうかすら不明だつた。ところで、そもそも私は一体何について考察していたのだつたか。あまりにも話が横道に逸れてしまつたので、すっかり忘れてしまつたではないか。いつたい何の話を。

「 れにしても、来週中には決めないと」

「 だね。ガクサイつて来月の・・・・・・」

「 5日」

「 うわっ、もう時間がねえ」

声だけが私の耳に入り、それぞれ誰の発した言葉なのか、確認し損ねた。またしても内省的になるあまり、彼らの会話の重要な部分を聞き逃してしまつたのだ。いつたい私は、どれだけ失敗すれば気が済むのだろうか と、ますます内省的になつてしまふようなことは考えずにおく。済んだことは仕方がない。オッペケペー。

「あ、そういうえば昨日の《カンジヨレ》観た？」

唐突に、子が話題を変えた。チェック柄のスカートを穿いている女だ。

「何それ。テレビ？」

C助が、残り少ないホットコーヒーを啜つてみせる。その手元を見れば、キムチ無し、餃子ゼロ。頬りのコーヒーも、カップの底が見えはじめていた。これからどうやって己の凄まじい口臭を「ごまかすつもりだろうか。

「・・・・・が出てる奴だろ。アイツ、モテモテだな憎たらしい」窓際に座っているA助が会話に加わる。そばには食べ散らかした鉄板皿と、飯粒がこびりついた白い皿があつた。平たい鉄板皿には、どろりとしたソースと脂が浮いているので、おそらく、ステーキかハンバーグの類を食べたのだろうが、それらの材料が、必ずしも豚や牛や鶏などの一般的な家畜の肉であるとは限らない。なぜなら、ここはファミレスだからだ。

A助や子たちが、最近どうやら注目を浴びているらしい俳優について擁護論や批判的意見を戦わせている一方で、今まで沈黙を守っていたB助が、わずかな動きを見せた。

私が見ていた限りでは、B助という青年は、他の4名の若者たちの会話にちつと耳を傾けているだけで、発言らしい発言をした様子はない。この青年に対する印象といえば、つい先程まで、ひたすら自分の股間を揉みしだいていたことが私の記憶に新しい。

そんな私の真新しい記憶に残っているB助の左手が、テーブルの端に置いてあつた会計レシートを掴んだ。そして自分の手元に引き寄せて、しばらく眺めたあと、股間を揉みしだいていない方の手つまり右手を、穿いているソフトジーンズの右ポケットに突っ込んだ。

他の4人の者たちは、チンチンカイカイB助の動きには目もくれず、人気俳優に関する議論を続けている。

会計レシートは、白い陶器製のグラタン皿とケチャップの跡が生

々しい平皿の間に挟まれて、B助の目の前に置いてある。グラタン皿の中には、小指の先くらいのエビが6つほど隅に寄せて残してあった。ただ嫌いだから残してあるのか、それともお楽しみを最後に取り置いてあるのか、私にはわからない。

ヒズミラクル その6

トウフトチーズノオチャメサラ
イカゲソカラアゲ
キノコゾエパエリアフウ
スペシャルハンバーグゼン
スープセット

ニヤンニヤンギョウザ

サンジュウハチドセンキムチ

ドリンクバー × 5

イチゴトマンゴーノパフェ × 2

イカホオンセントマゴ

ヤマノテハンバーグセット

イカメンタイ

ボーミートガールスピゲツテ

カリファルニアポテトステイツ

エイコクフウタマゴサンド × 2

会計レシートは、全部で3枚あった。そして、B助の手元には、いつのまにか封筒が握られていた。それは股間を揉みしだいていい方の手。つまり右手にあるので、さきほどポケットから出したのは、この封筒だと思う。

それは白地にわずかな赤い二重線が施されているシンプルなもので、端には『 × 銀行』というロゴが印刷されていた。ここでいちおう言っておかなければならぬが、この『 × 銀行』というのは私の目に映つたそのままの表記であり、この『 × ×』とは匿名性を表わす記号ではないということだ。B助が手にしている封筒には、確かに『 × 銀行』と印刷されているのだ。あいにく、フリガナが打たれていないので、読み方まではわからない。常識的に考えるな

らば「マル・バツ」と読むのかもしれないが、そういう読み方は、むしろ匿名であることを強調する場合の読み方であり、もしかして「ヒヨンロロロ・ピー」銀行などと読むのかもしれない。さらに穿つて考えるならば《×》の部分だけではなく《銀行》といふ部分の読み方も、社会通念としての「ぎんこう」ではなく「トレロレンルヌ・パツツン」なのかもしれない。仮にそうであるならば《×》銀行》の読み方は「ヒヨンロロロ・ピー・トレロレンルヌ・パツツン」なわけだが、おそらく「マル・バツ・ギン・ロウ」が正しい読み方なのだとと思う。

「足りるか？」

窓際のA助が、会計レシートを手に持つて言った。

「うん。昨日ちょうど売上口座から下ろしてきたから」

そう言って、B助は封筒の中から紙幣を一枚取り出してみせた。どうやら、ここにいる5名の食事代を、彼ひとりが一括して支払うような雰囲気だ。ところで「売上口座」とは何のことだろうか。

「あっ、おい、1万テックテケー越えてるぞ。ちょっと食いすぎだろ」

A助が呆れたような笑い声をあげて、C助の方に視線を向けた。それは非難するような口ぶりではなかつたが、その言葉のとおり、C助の前には、キムチを筆頭とした口臭緩和メニューのほかに、食べカスの付着した皿が3枚もあつた。

「ごちそうさまー」

嬉しそうな表情で開き直つてみせるC助の傍らで、B助は封筒を再びジーンズのポケットにしまっていた。手には1万テックテケー紙幣が2枚、つまり2万テックテケーが握られていた。いちおう言っておくが「テックテケー」とは通貨単位のことだ。B助が持つている紙幣の表面に《10000テックテケー》と印刷されているから間違いないと思う。

「それにしても、先月の売上、すごかつたよなあ・・・80
ウン万だろ、確か」

「87万2700テツ テケテー」

まるでC助の曖昧さを叱りつけるように、隣りのB助が早口で言った。さきほどの封筒の金といい、どうやらチンチンカイカイB助は、このいががわしいグループ内における金庫番の役割を担っているようだ。

ところで、先月の売上が「87万2700テツ テケテー」あつたところが、これは一体どういう意味だらうか。「売上」といつからには、アルバイトなどによつて得た賃金ではないだらう。

いつたい、どのようにして稼いだ金なのか。

実をいうと、ここだけの話だが、他の者に知られると非常にマズイ話なのだが、私にはおおよその見当がついていた。先程からこの5人の若者たちの会話を聞いていた中に、ピンとひらめくものがあつた。

ズバリ言つてしまおう。

彼らは『トイレ盗撮』を行つてゐるに違いないのだ。

80万テツケテケー余りもの売上は、トイレ盗撮映像を販売することによって得たに違いないのだ。彼らは「トイレット研究会」という、何の有用性もないかに見えるサークル活動を隠れ蓑にして、トイレ盗撮ビデオの地下販売を行つてゐるに違いないのだ。そして、トイレ盗撮というからには女子便所、女子便所といえば通常は女性しか足を踏み入れることができないわけで、すなわち 子か 子が 盗撮力カメラ設置の尖兵となつてゐるに違なく、この2人の醜女は憎むべき犯罪者であるに違いないのだ。醜いのは顔だけかと思つていたが、どうやら性根すらも醜いに違いないのだ。

そしてそして、さらに憎むべきは、その心身ともに醜い2人の女たちを背後より操つてゐる男性3名の存在だ。その面々が「A助」「B助」「C助」であるのは、もはや疑いようのない事実であり、私は確信している。そして、彼らは盗撮ビデオを販売しまくつてい

る。そうでなければ、1ヶ月のあいだに80万テツテケテー近くの売上を得ることなど不可能なはずだ。まあ、もしかすると「トイレット研究会」だけに、何か特別な『トイレットペーパー』を製造・販売している可能性も考えられるが、彼らが発した数々の言動からすれば、ちょっと有りえない。つい数分前 口臭魔人ことC助が、自分たちの活動を大々的に発表すればいいと言い放った時に見せた他の4人の凍りついた表情を、私は決して見逃さなかつた。そして「わたしたちのやつてることを発表するのはヤバイと思う・・・」「俺らがあんなことやつてるってバレたらヤバイに決まってるだろ。退学・・・・・下手したら、高いコンクリート塀プラス有刺鉄線の向こう側へと引越しするならダック」などという若者たちのひどく怯えたような発言を思いおこせば、この5人の男と女と女と男と男たちが、憎むべき犯罪者集団であることは明白であり、可及的速やかに最寄の警察署に通報するべきなのだが それは私の役割ではない。

勘違いしないでいただきたいのは、この「私の役割ではない」という私の述懐は「私は遵法精神あふれる立派な市民ではないし、そもそも犯罪の告発というものは、国民の税金により運営されている警察もしくは検察の役割であり、そんな面倒なことができるほど私はヒマ人ではないのだ。ああ忙しい、忙しい」などといふような『自らのことを善良な市民だと思い込んでいるくせに、いざとなると何もできない小心者』が時折見せる典型的態度などでは決してなく、ただ単に、私の役割でないだけなのだ。だつて、だつて考えてもみていただきたい 電灯のスイッチを「OFF」から「ON」にもできないほど強い制約を受けている私が、どうして受話器を手に取り緊急回線のダイヤルを回して通報するなんてことができるだらうか。できないでしょう。できないのだ。できないもん。

さておき。

私が我に返ると、あの5人の男女たちの姿が無かつた。有るのは散らかつたテーブルと、布地に非芸術的なシワを寄せている空虚なソファーだけだった。

私はこれを、どう見たら良いのだろうか。

世にも不思議な人間消失現象か？ それとも壮大な連れショ恩すなわち、大小それぞれの用便を足すために集団でトイレへと向かつたのか？ はたまた・・・・・・もう、よそう。

私は、またしても内省的になりすぎるあまり、彼らのことを見失つてしまつたのだ。

あたりを見渡すと、空いた席が目立つていて。それでも、わずかに数組の客が、このファミレス内で食事をしていた。

残念なことに、私の視界内には、若き犯罪者たちの姿は無かつた。さきほど、B助が封筒から金を出していったことを考えると、もしや食事の清算に向かつたのかもしれない。

しかし、レジカウンターらしき場所には誰もおらず、今なら難無くレジスターに納められた現金を強奪できるだろうが そのとき、突然、驚くべきものが私の目に飛びこんで来た。飛び込んで來たと言つても、私の眼球に向かつて蠅や蜂などが飛来して來たという意味ではなく、ある生物の姿が私の目に映つたのだ。

ヒグミラクル その7

その生物は、衣服を何も身に着けておらず、全身の素肌を露わにして、このフアミレスの店内に入つて来た。

その肌は白く、とても白く、まるで白玉団子の そう、まさしく白玉団子が歩いているのだ。言つておくが、白玉団子のような白い肌を持つ人間ではなく「人間の形をした身長160センチほどの白玉団子そのもの」が、私の目の前に現れたのだ。

白玉団子は、3人連れだつた。白玉×3という意味ではなく、若い男女の後ろに連れ添うようにして素っ裸の白玉団子が立つていた。若い男女の方は、きちんと衣服を身につけている。

すこし遅れて、お客様の到来を嗅ぎつけたウェイトレスが姿を表わす。

「いらっしゃいませー。2名様でしょつか？」

その言葉に、私は自分の耳を疑つた。だが、疑つてもしょうがないので聞こえたまま受け取ることにする。ウェイトレスは白玉団子を頭数に入れなかつたのだ。なぜなら、若い男女のほうは仲睦まじく腕を絡めていたからで、ウェイトレスが言つたの「2名様」とは、この男女のことに間違いないだろう。

すぐに訂正するかと思いきや、若い男の方が無言でうなずき、ウェイトレスの「2名様発言」を了承してしまつた。白玉団子の方をうかがえば、異議を唱えるような様子はなく、ちつと黙つていた。

「では、おたばこ下さいになりますでし あはいそれではあちらのきんえんせきになりますこちらですどつぞ」

何かを早口でまくしたてながら、ウェイトレスが店の奥に向かつて若い男女を導く。その後ろを、白玉団子がついて行く。膝を曲げずに歩いている。外見は人間の形をしているものの、白玉団子はお尻を備えておらず、背中から踵まで、ほとんど膨らみが無かつた。

ウェイトレスは、はじめ窓際の席を勧めたが、若い2人はそれを断り、通路を挟んだ向かいの席を希望した。ウェイトレスは無表情でそれを承諾して、再び店の奥へと戻つて行つた。

ソファーに腰を下ろす際、男の方がサングラスを通して、控えめに辺りを見回した。窓際には5席あつたが、そのうち2席が埋まつていて利用者がいる。

若い2人は、巷の恋人たちの例に漏れず、テーブルの片側に肩を寄せ合つて腰を下ろした。白玉団子は、その向かい側に座つて、ソファーを独り占めした。

「あ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

女が、男の耳元になにかを囁きはじめた。この女もサングラスをかけている。おそらくオシャレなのであるう帽子も脱ごうとはしない様子だつた。すぐに男が女の耳に囁き返すと、口元を緩めてクスクスと笑い声を漏らしていた。私は、ほんの少し気分を害してしまった、白玉団子の方に目を向けることにした。

白玉団子は、テーブルの上で頬杖をついていた。あらためてその表情を眺めると、やはり白玉団子そのもので、目もなれば鼻もなければ口もなれば眉もなればニキビも無い、いわゆる「のっばらぼう」だった。それから、両手で頬杖をついたまま、わずかに顔を左右に揺らしていた。

「失礼いたしまーす」

早速、ウェイトレスがお冷を携えてやつてきた。丸いトレイから下ろされたのは、背の低い2杯のグラスと、フォークやスプーンが収められている小さな籠で、ウェイトレスは当然のようにグラスを2人のそばに置いた。2人とは、つまり若い男女ふたりのことであり、あらうことか白玉団子の分が無かつた。

この瞬間、私は、ウェイトレスの白玉団子に対する差別的待遇に接して頭に血がのぼりかけたが、すぐに興奮は収まつた。

ウェイトレスには、白玉団子の姿が見えていないらしい。

「」の事実に気がついた私は、さっそく白玉団子を注意深く観察することにした。

白玉団子は、相変わらず頬杖をついて、顔らしき白玉団子を左右に揺らしていた。よくよく見れば、この白玉団子は「化け物」と言つても差し支えなく、両手で頬杖をついている姿は不気味だつた。一方の若い男女は、メニュー表を眺めながら、何やらヒソヒソと囁きあつてゐる。おそらく、彼らも白玉団子の存在に気が付いていないに違ひなかつた。なぜなら、いくら恋は盲目と言つても、こんな白玉団子の化け物が目の前にいれば、どんなデレ助デレ子でも悲鳴の一つぐらいはあげるだろう。全く見えていないからこそ、平氣でイチャイチャしていられるのだ。不愉快な。

例によつて、私は、この若い2人が何者であるかを知らない。しつこいようだが、私は超能力者でもなければ、全知全能の神でもない。だから、見た目で判断するしかない。

デレ助とデレ子は、2人とも顔立ちが整つていた。瞳は大きく、鼻筋が通つていて、唇も薄い。それこそ、さきほどのトイレット研究会の者どもとは比べ物にならない。

と、まあそのような他人の容貌にまつわる中傷はこれくらいにしておくとして、次に、デレ助デレ子の身なりに目を移せば、安くない格好をしていた。なぜそう思つたかと言えば、特に根拠はない。ただ、カーディガンとか、ジーンズとか、セーターとか、ましてやトレーナーとか、そういう単純な種類の服装ではないらしいということが、2人の服装からは見てとれた。

苦手な服装の話題はこれくらいにして、現在の時刻は、午前5時49分だつた。デレ助が身に着けている腕時計の表示を見たわけなのだが、服装と同じく、これもまた安くない代物なのだろう。

ウインドウガラスの外が少し明るくなつていて、まだ雨が降り続けていて空は薄暗いなどと私が思つてゐると、窓際の席に座つていた女の3人連れと目が合つた。

しかし、彼女たちと私が目を合わせられるはずがないので、正確に言えば、窓際の連中がデレ助・デレ子の席の方向に視線を向けていたのだ。

窓際の女3人連れは、テーブルを軸にして手前に1人、奥に2人が座っていた。驚くべきことに、先程から驚くべきことばかり続いているが、とにかく驚くべきことに3人が3人とも同じ顔をしていた。髪型もほとんど同じ茶髪のロングヘアであり、服装は全く同じではないものの、同系色のスウェットを着ていた。

戸籍を閲覧してみなければ断言できないものの、おそらく彼女たちは3つ子ではないだろうか。小鼻の脇にあるホク口の位置まで同じなのだから、ほぼ間違いないと思う。

そんな一卵性多胎児たちが、揃いもそろってデレ助・デレ子の方に視線を向けているので、すこし気味が悪かった。私の目の前では、依然として白玉団子の化け物がカワイイ感じで頬杖をついているのだが、3つ子の実在は、それにも増して異様な光景だった。

「何か、食べようかな」

「慎也はメニュー表をめぐりながら、胃にもたれすぎないような軽食を探していた。ハンバーグやその他の肉類などは受けつけそうもなかつたし、パスタメニューでさえも、今の慎也の胃にはすこし重く感じた。それから、ひと通りメニュー表すべてに目を通したもの、なぜかサンドイッチなどの軽食メニューは見当たらなかつた。見逃したのかと思い、慎也はもう一度はじめからメニュー表を手繰りはじめる。その横でパパ子は、口をはさむわけでもなく、慎也の様子を見守っていた。パパ子は、こういつ何気ない時間を幸せに感じる女なのである。」

と、白玉団子が言った。

確かに言つた。とてもその声は小さかつたが、間違ひなく、私は白玉団子が喋るのをこの目で見て、耳で聞き、肌で感じた。

私は、その声と内容の聞き取りを確実なものにするため、思い切って、白玉団子の脣があると推測される白玉団子の一部分に近づいてみた。

「あ。あつたあつた」

「3つ、あるね」

「2人は、メニュー表のなかの同じ写真を指差してみせた。パピ子の言うとおり、サンドイッチのメニューは3種類あった。価格はそれぞれ似たようなものであり、ハムや卵やフルーツの具材、というような種類があった。」

白玉団子は、息継ぎをする気配も見せず、ただひたすら朗々と喋り続けていた。テーブルに頬杖をついて、2人の男女を代わるがわる眺めながら、たとえば慎也ことテレ助が声を発すれば、白玉団子は慎也の方に白玉団子の顔を向け、パピ子ことテレ子が声を發すれば、そちらに白玉団子を向けた。

つまり、白玉団子には、声を発した人間を必ず一瞥するという習性があるようだ。なにも、カワイイ子ブリッ子のつもりでルンルンランランと首を振り続けていたわけではなかつたのだ。私は、勘違いをしていたらしい。

「これも胃にもたれそうだなあ」「あまり気が進まない様子で、慎也はメニュー表を閉じじよつとする。

「

と、男の方に顔を向けながら、白玉園子が呟く。

「え、なんで？ サンドウイッチくらいなら大丈夫じゃない？」

「そう言いながら、パピ子はメニュー表を受け取ると、サンドウイッチメニューの写真をぢっと眺めた。」

女の方を見てそう言つたのは、やはり白玉園子だった。

「フルーツサンドウイッチが一番胃にもたれないっぽいけど、これつて生クリームが挟んであるから、実際はもたれるかもね。タマゴサンドはマヨネーズが混せてあるだろうし・・・・じゃあ、ハムサンドウイッチしかないね。これにしたら？」

「楽しそうに、パピ子が3種類のサンドウイッチの解説をしてみせる。

「

それはまさに、成熟した俳優の朗読劇だった。白玉園子の声は、聴く者の耳に心地良いのだ。

「いや、俺が問題にしてるのは中身じゃないんだよね、パピ子ちゃん

」

「得意気な顔で、慎也がふたたび口を開いた。

「ど、白玉園子。

「えー？ シンくんの問題つて、なーに？」

「こしづかり胸焼けがしてきた。

しかし、それは氣のせいであり、私は、テーブルの上の「お冷」に手を伸ばしたい衝動に駆られたような気もしたが、それはやはり氣のせいに過ぎなかつた。つまり、目の前にいる2人のやり取りに對して感じた胸焼けは、私の氣のせいだつた。

「だつて・・・・この店のサンドウイッチには、どれにも耳が付

いているだろ？俺、嫌いなんだよねパンの耳が」

「慎也は、メニュー表に印刷してあるサンドイッチの写真を指でなぞつてみせた。たしかに、フルーツ、タマゴ、ハムいすれのサンドイッチの写真にも、耳つきのパンが使用されていた。どれにも英国風と銘打たれていて、さらに本格派などといつ売り文句も添えられていた。」

と、このように白玉団子が如才なく働いてくれるので、私はしばらぐの間、黙つていることにする。休息の意味も兼ねて、熱いコー ヒーの一杯でも飲みたいものだが、私には望むべくも無い。

「へー・・・・・じゃあ、お店の人について、サンドウイッチの耳だけ削いでもらえば？」

「至極真っ当な意見だった。」

「あは。おー、なんだよ『削いで』って。パピ子は難しい言葉知ってるんだなあ」

「えー？ だつて、ふつう『耳を削ぐ』って言つてしまふ？」

豊民秀太郎が朝鮮出兵したとき、敵兵の耳を削いで塩漬けにしたものがお土産にさせたつて話あるし

「パピ子は、こつ見えても読書家なのである。撮影の待ち時間などを利用して、特に歴史小説の文庫本などを読むのが習慣になつてた。それは、パピ子の出演作に参加したことのあるスタッフなら、誰もが目についてる光景だつた。」

と、淀みのない口調で、白玉団子が言つた。

驚くべきことに、この白玉団子の化け物は、デレ助デレ子の名前が「慎也」「パピ子」であることを知つてゐるし、そのほかにも彼らの詳しいプロフィールや来歴なども把握しているようだつた。

私が察するに、白玉団子によるパピ子に関する説明のくだりで「撮影」「出演作」などという単語が飛び出したことからも、この読書が趣味の女は、女優かテレビタレントを生業としているのだろう。どうりで目鼻立ちが整つているはずで、おやらく慎也も同じ業界の人間にちがいない。

「…………なあ、パピ子」

「慎也が、わずかに眉根を寄せて、隣にいる恋人の顔を覗きこむ。」「なあに、シンくん？」

「そう言って、パピ子はサングラスをはずしてから恋人に視線を送り返してみせる。」

「俺、ちょっと気になつてたんだけどさ……この食べ物の名前は？」

「そういうて、デレ助は、メニュー表に印刷されているサンドイッチの写真を指差した。」

「え、これは、ハムサンドウイッチでしょ。やっぱりこれにするの？」

「いま、何て言つた？」

「フフ、もー、なーに？　ハムサンドウイッチでしょー」

「おかしそうに口元を緩めながら、パピ子は、慎也が差している手のひとさし指を、やわらかい掌でそつと握りしめる」

「パピ子ちゃん、違うよ。これはサンドイッチっていうんだよ」

「そうだよ、サンドウイッチだよ。もー、シンくん、なーに？」

「サン・ド・イ・ッチ」

「サン・ド・ウイ・ッチ」

「慎也の言葉のあとに続いたパピ子は、ようやく、自分の恋人がなにを言いたいのか悟つた。」

と、白玉団子が言つたのと同時に、私も悟つた。

つまり「肉や野菜をパンにはさんだ軽食」の呼称における、それをいな発音の違いについてだつた。実に、ばかばかしい。くだらない。そもそも、こういう細かいことにこだわる男というのは、将来かなりの高い確率で、恋人や妻に対して暴力をふるうつになる。いわゆるダメティックバイオレンスのことなのだが、まあそんなことはどうでもよい。2人のやりとりを見ているうちに、思わず反吐が出そうになつたが、もちろん實際には出なかつた。

私は口直しに、思い切つて、一卵性多胎児たちがいる窓際の席に

移ることにした。と言つても、似た顔が3つも揃つてゐる光景は、うす「氣味悪い」と言つても差し支えがないほどで、口直しになるかどうかはわからない。

「 つたい、ヤッてると思ひ。まひま日暮ヤリまくつ」

「 テレ助たちから見て、テーブルの手前に座つている3つ子Aが、声をひそめて言つた。

「 ちよつと一聞こえたらびづすんのよ」

慌てたように、3つ子が「シ一」と立てた人差し指を、唇にそえてみせる。その隣に座つている3つ子は、必死になつて笑いを押し殺していた。

ちなみに、ロシア文字を3つ子のそれぞれに割り振つてみたのだが、特に意味はない。これらは、A^ア（テー）（ゼー）と読み、厳密に考へるならば、3つ子といえども、もしかすると全員が同い年ではないかもしねず、たとえ同じ分娩のときに一気呵成に「ポン・ポン・ポポーン」と産まれたのだとしても、その後、分娩に立ち会つた医療関係者ならびに母親のきわめて曖昧な記憶ならびに両親による恣意的な判断によつて姉妹の区別がなされているはずであり、ちょっと長くなつてしまつたが、とにかく「A」「シ一」「ポン」という3つの記号の割り振りが適切かどうかといふことに關して、私は責任をもてないといふことが言つたかった。

「写真撮る」

さきほど品性の無い発言をした3つ子Aが、自分の携帯電話をそつと手に取る。

「 やめなよー。怒られるつて」

どうやら3つ子は、3姉妹のなかでは「いさめ役」のようだつた。しかし、それをいつつも、テレ助テレ子の方をチラチラと気にしていた。

「 写真週刊誌とかに売つたら、お金もらえるらしくよー」

そう言つたのは、さきほどまで愉快そうに傍観していた3つ子だった。つづづく品性が下劣な連中だと思った。

私はどちらの味方というわけでもないが、デレ助デレ子たちの方をうかがえば、素人パパラッチの気配に全く気がついていない様子だった。急遽、私は席を移ることにする。

「だから、サンドウイッチって言つなよ。わかつた？」

「まるで、幼い子供がもう1人の幼い子供を諭すような言い方だつた。たかがサンドウイッチの呼び方」ときに、慎也がどうしてこれほどまでにこだわるのか、パピ子には理解できなかつた。以前から、自分の恋人には少なからず幼児性を感じていたものの、それは慎也の数多い魅力のうちの1つだと信じて疑わないのでいた。しかし、このサンドウイッチの件に接して、わずかながら、パピ子は2人の前途に不安を感じてしまつた。このように、ほとんどの恋愛にもれなく付いてくる「美化フィルタ」という装置は、ほんの些細な出来事ではずれてしまつものらしい。」

白玉団子の分際で、なかなか小難しいことを言ひ。しかも、パピ子の心理にまで言及するという離れ業をやつてのけている。

さすが白玉団子の化け物だけあつて、人の心まで読めるというわけだ。とてもじゃないが、平々凡々たる私などには真似ができない。これからは呼び捨てるのではなく、敬意を表して「白玉団子氏」と呼ぶことにしようとした、私は思った。

「ふにゃん

とは何事か。

そういう音が、私の耳に入つてきた。

はて「ぶにゃ～ん」とは何だらうか。「こや～ん」だけなら、ま、これはネコの鳴き声であると確信が持てるのだが、しかし先頭に「ぶ」という濁音がついている。ネコの鳴き声にも「いろこや～ん」とこう先頭に濁音をもつて表現されるものがあるので、べつに「ぶにゃ～ん」がネコの鳴き声であつても差し支えがあるわけではない。

「ぶにゃ～ん」
「ぶにゃ～ん」

つきは2連続で聞こえてきたわけだが、これはネコが2匹いるということだらうか。つまりこのファミレスの店内のどこかに、たとえば親子、もしくは兄と妹、もしくは叔父と姪、もしくは茶呑み友達のネコなどが2匹潜んでいることだらうか。それとも1匹が2連続で啼いたのだらうか。

「ぶにゃ～ん」

私が「ぶにゃ～ん」の出所を探るためにファミレスの店内を見回していると、そこへちゅうびウエイトレスがやってきた。デレ助とデレ子は、待ち構えていたように、くたびれた女の顔を見上げる。くたびれた女とはウエイトレスのことで、見た目は30代前半といふところだった。いかにもウェイトレス風の格好をしていて、服装の名称につい私の手には余るが、それは少なくとも割烹着で無いことは確かだつた。

「注文をおうかがいします」
「デレ助が呼び出しボタンを押してからまもなくして、ウェイトレスがやってきた。手には、テレビのリモコンをふた回りほど大きく

したよ「うな端末を携えている。おそらく深夜パートタイマーなので、あらう年増のウイトレースは、喜びとも悲しみともつかない表情で、その場に佇んだ。」

「ええと、えつとね『本格ハムサンド』ひとつ、それと、ええと、あとはオレンジジュースも下さい」

「通路側に座っているパパ子が、メニュー表のところどころを指差して注文する。」

「・・・・・サンドがあひとつ。オレンジジュースがあひとつお飲み物はドリンクバーでのセルフサービスとなつておりますが、よろしいでしょうか?」

「うん、いいよ。あ、それと俺もドリンクバーひとつね」

「パパ子に続いて、だいぶこなれた様子で慎也が告げてみせた。」

「え? シンくん、サンドウイ・・・・・サンドイッチは?」

「わざわざ言い直すところなど、なんと健気な女だろうか。」

「やめとく。やっぱり耳付きのサンドイッチなんて食えねえよ」

「だから大丈夫だつて。私が、ゼーんぶ削いあげるつて言つたでしょ?」

「べつに構わないのだが、削ぐという言葉は何か物騒な感じがする。パパ子に促されて、ようやく慎也はサンドイッチを注文することにした。タマゴサンドである。」

「ふにゃーん」

また聴こえた。

私は即座に「ふにゃーん」の方向へと視線を向ける。啼き声の先には、どうやら血統書付きらしいう毛並みの良さそうな仔猫などが居るわけもなく、代わりにいたのは、どこかの馬の骨ともつかない、意地汚く、うす氣味の悪い3つ子Aと と だった。

「ふにゃーん」

私は、ふたたび3つ子たちの席に移る。

そこには、携帯電話を掲げている3つ子Aの姿があった。その小さな液晶画面には、あらうことかテレ助テレ子の姿が映っているではないか。

これはつまり盗撮。すなわち盗撮。要するに盗撮。ひいては盗撮。限りなく盗撮に近い盗撮。若きウェルテルの盗撮。百年の盗撮。続いている盗撮。盗撮、あおむけにされて。盗撮人たち。盗撮船団。盗撮のガスパール。盗撮好き盗撮好き盗撮大好き超盗撮して。盗撮ガール。蹴りたい盗撮。いずれにしても、もはやこれは犯罪行為と呼んでも差し支えのない所業だつた。

さすがはファミレス。現代を代表する「スラム階層の集会所」だけのことはある。

「ぶにゃーん」

卑劣な3つ子Aが携帯電話のボタンを押すと、おなじみの声で啼くのが聴こえた。その小さな画面を見れば、ウェイトレスの背中に遮られているものの、通路側に座っているパピ子の表情がはつきりと映し出されていた。

つまり、件の「ぶにゃーん」とは、携帯電話に付属しているカメラのシャッター音だったのだつたのだつたのだつた。

「あのウェイトレス、ジャマ～。マジしますぐ死んで欲しい」
携帯電話を構えたまま、3つ子Aが悪態をつく。

これは、例えば銀行強盗が、奪うカネを袋に詰めている行員にむかって「紙幣の方向を揃えて入れる。それから新札と旧札を混ぜないでね。でないと殺す」と言つのに等しいと思うのだが、余計わかれにくいかもしれない。

まあそれはともかくとして、3つ子Aは、テーブルの上に両肘をつき、カメラのブレを最小限に抑えて、ますます盗撮行為に励んで

いた。

もしも私が全知全能の神であつたなら、この3つ子Aがシャッターボタンを押す瞬間に、テーブルに向かつて全力で蹴りを入れてやりたいところだが、まあ例によつてそれは実現不可能な願望にすぎなかつた。

「2人が注文を告げ終えると、ウェイトレスは確認もせずに、さつさと席を離れていった。注文メニューの復唱は、ファミレスにおいてもはや常識だと思うのだが、あの年増のウェイトレスはそれを怠つた。とはいへ、あの注文品目の復唱というのは、客の立場からすると、やや居心地が悪いといふか、恥ずかしい感じがするのも確かである。」

白玉団子氏が、現代のファミレス文化について考察をしてみせた。「ウェイトレスが立ち去つたあと、パピ子は窓の外を眺めた。この店に入つたときよりも、ずいぶん空は明るくなつていた。しかし、まだ小雨はふり続いている。」

「ふにゃん

例のシャッター音が、また聴こえてきた。ウェイトレスの陰に隠れてやつてゐるのかと思つてゐたが、そんなことはお構い無しのようだ。

「天井のあたりを漂うBGMに混じつて、妙な啼き声がパピ子の耳に入つてきた。辺りを見回していると、窓際の席にいた利用客と、うつかり目が合つてしまつた。」

「あ

「それと同時に、自分たちに向けられた浅ましい窓視線にも気づいたが、この突發的な事態にパピ子はどう対処すればよいのかわからず戸惑つた。とりあえず反射的に、隣にいた慎也のジャケットを引つ張る。」

「ん？ なに、パピ子ちゃん」

「顔をしかめ不快そうにしている恋人の視線の先には、携帯電話を構えた一般人の姿があつた。驚いたことに、その3人ともが同じ顔をしていたので、慎也は自分の目を疑つた。コンタクトレンズがずれていいるのかと思ったのだ。」

しかし、あれは正真正銘の3つ子なのだ。私がひとつ言つてやれば済む話なのだが、例によつてそれはできない。

デレ助は、なおも斜向かいの席にいる3つ子のことが信じられない様子で、サングラスをはずした。

「眩しくて、ほとんど瞼を開けていられなかつた。それでも、慎也は眼を細めて、物珍しい女性3人組の姿を捉えようとした。今までずっとサングラスをかけていたせいなのか、なかなか明るさのギャップに慣れることができない。」

白玉団子氏の言つとおり、窓の向こう側は明るかつた。時間が気になつた私は、デレ助の腕時計を覗き込む。

6時3分。

もう夜明けというには遅すぎるほど の時間ながら、窓の外が明るくても何ら不思議ではない。

「さきほどまで降っていた小雨は、いつの間にか止んでいた。それどころか、このファミレスの窓の外は、まるで真夏の昼間のように明るかつた。空を見上げれば、光が満ち溢れていて、雲ひとつ見当たらない。それどころか青空ひとつ見当たらなかつた。」

そう言い終えると、さきほどまで頬杖をついていた白玉団子氏が、唐突にソファーから立ち上がり、大きなWINDOWガラスに向かってその場に佇んだ。

氏が言つとおり、空は といつよりも、窓の向こう側は、光で満ち溢れていた。

ただし、それは陳腐な比喩表現としても、希望もしくは平穏の暗喻として「光に満ち溢れている」のではなく、店内を囲むように設置されている四方のWINDOWガラス向こうの「風景」が、すべて光によつて塗り潰されているという、文字通りの意味だつた。

「慎也は、呆然となる。いきなり目の前が真っ白になつたのだ。これをホワイトアウトというのだろうか。あいにく雪山で遭難したことがないから実際のところはわからない。ともかく慎也は、いま自分が瞼を閉じているのか開いているのか判断できなかつた。立ちくらみを起こしたのかとも思つたが、そもそも、自分が立つているのか座つているのかもわからないほどに、慎也からは平衡感覚が失われていた。」

ちなみに、いま慎也はソファーに座つてゐるはずだ。なぜなのか、

さすがの私も目がくらんでしまい視界は芳しくない。しかし、眼がくらむ直前に、慎也とパピ子が座っているのを目にしているのだから間違いないと思う。私も慎也と同じで、自分が瞼を開けているのか閉じているのか判断できないでいる。

いつたい、何が起こったというのか。

「膨大な光線によって視覚と平衡感覚を失ったのは、パピ子も同じだった。突然の出来事に正気を失いかけたものの、パピ子はとっさに隣へと腕を伸ばして、恋人の感触を確かめようとした。パピ子にとって『シンくん!』と何度も叫ぶ己自身の声が、正気を保つための唯一の助けになっていた。」

と、このように2人の心理を冷静に説明しているのは、もちろん白玉団子氏の声だった。

周囲からは、不特定多数の「わー」「きやー」「おひょひょー」という叫び声が聴こえる。何の前触れもなく目の前が真っ白になつたのだから、まあ無理もないだろう。

「しかし、無限大かと思われた窓外の光は、さつそく勢いを失いはじめていた。それは、なにか中心に向かつて吸い込まれていくように見えた。あつという間に、店内からも光は去つていつたが、まだ誰も、瞼を開けられる者はいなかつた。」

しかし、白玉団子氏には全てお見通しのようだつた。突発的な出来事にも動搖することなく、きわめて落ち着いた様子で、淡々と状況説明を続けている。

私は、白玉団子氏の言葉を信じて「光が去つた」という店内に向けて、閉じていた瞼をおそるおそる見開いてみた。

「光源の出所を目で追えば、そこには太陽のようなものがあつた。ビルや数多の商業施設の合間に縫つて、驚くほど低い場所に、きわめて強い光を放出している巨大な火球が、地上に伏したまま蠢いていた。それは

大音響。

何の音かといふと、これはウインドウガラスが破碎した音だつた。

3つ子A　たちが座つてゐる窓際のガラスが、店内に向けて勢いよく飛び散つたのだ。

「6面のウインドウガラスは、それぞれ、およそ100号絵画くらいの大きさがあつた。それらが一瞬で粉々に砕け散り、その破片はおそらく音速に迫る勢いで、店内に向かつて水平方向に吹き飛んだ。

」
つまり、どういうことかと言えば、窓際に座つていた人々に、無数のガラス片が降り注いだ。

「その3人の女性は、みな同じ顔をしていた。たぶん3つ子なのだろう。一卵性多胎児というのは、容貌が似ているだけでなく、食事や服装の好み、ひいては普段の思考内容までが似通つてゐると言われる。しかし、たつたいま降り注いだ微小なガラス片の突き刺さり具合は、3人ともがそれぞれ異なつていた。」

たとえば、一卵性双生児の弟が車にはねられて死んだとしても、それと同時に、まったく別の場所で、たとえば公衆便所で、用を足している兄が車にはねられ死ぬなどということは滅多に無い。白玉団子氏は、そういう意味のことを言いたいのだろう。

「まず、テーブルを軸にして手前に座つていた3つ子の一人　便宣上、3つ子の梅子と呼ぶ　　の場合、ウインドウガラスに背中を向けていたものだから、破片のほとんどは、着衣ごしにすべて背中や襟足のあたりに突き刺さつていた。痛覚は、正面よりも背面の方が鈍いという根拠のない印象があるので、おそらく、あまり痛みを感じなかつたのではないかと思われる。その右手には、携帯電話を握りしめていた。

他人の私生活を盗み撮りした「バチ」が当たつたのだ。

私は、いい気味だと内心ほくそ笑みながら、引き続き、白玉団子氏の話に耳をかたむける。

「つぎに、3つ子の竹子と松子の場合、ウインドウガラスに向かつ

て、ちょうど横つ面を向けていたものだから、当然、ガラスの破片は頬や耳朶などを標的にして突き刺さっていた。これは痛いに違いない。とくに竹子の場合、窓際に座っていたものだから、凶器と化した無数の不等辺多角形すなわちガラス片を、文字通り全身で受け止めるハメに陥っていた。あえて、この不等辺多角形に関して説明するならば、その「辺」の総和イコール「瀕死」という等式が成り立つかもしれない。

とにかく、痛いどころの騒ぎではない。「頬」つまり「ほっぺ」とは、人間の身体のなかでも、もっとも痛みを感じやすい箇所のひとつであり、だから全国のお母さん達は、子供が悪事をすると「ほっぺ」をつねるのだ。

元来、お母さんというのは、本能的に人間の弱点をよく知つてい
て、これまた本能的にそれを我が子や我が良人の教育にうまく利用
しているというわけなのだが、それが夫の場合は「ほつぺ」ではな
くまあそんなことはどうでもよい。

抜けていったかのような音だった。

何の予告もなしに、私は、とてもない耳鳴りに襲われたのだ。それはまるで、長い長い例えば全長2メートルほどの注射針を、ひと思いに勢い良く右耳の穴から左耳の穴へ突き通されたような、思わず叫ばないではいられないような、激しい痛みを伴つものだつ

た。 一
レ
て
か
ら
で
つ

途切れながらも、白玉園子氏の朗読調が聽こえる。なおも耳鳴りが続いているせいで、氏が何を言つてゐるのか、うまく聞き取ることができない。

き-----ん

ふと、3つ子たちの方に目をやれば、携帯電話を持つている3つ子Aが床に倒れていた。白眼を向いて、情けない表情のまま鼻血をたらしていた。その片割れである3つ子とは、ソファーの背中にもたれかかり、やはり眼球をでんぐり返して、ダラダラと鼻血やら鼻汁やら豚汁やらを垂れ流していた。どうやら、あらかじめ注文していた豚汁を口に含んでいた瞬間に、この災難に見舞われてしまつたようだ。

不思議なことに、およそサクラの花ビラほどの無数のガラス片が突き刺さっている顔面や首筋の傷口からは、1滴の血も流れていなかつた。まあ考えてもみれば刺さりたてホヤホヤなのだから、そういうものなのかもしれない。

「慎也は、祈るよ　　」　　を閉じて震えていた。それは、隣でその腕を抱

　　パパ子にと　　頼りな　　あるが、幸いしていた。なぜなら、さきほどウイ　　ガラスの破片が飛散したこと　　パパ子左顔面は、まるでビックシリとガラスの鱗が生えなつて　　である。もし、ふたたびお互いが見つめあおうら、今まで2人の愛情を支えていた　　が首を　　壊れてしまうかもしれない。」

耳鳴りが微弱になり、聴覚が戻りつつあった。

相変わらず、人々の阿鼻叫喚が途切れることなく続いていた。

といあえず生ペール

「パピ子が、溶けはじめている。」

そんな一言が、白玉団子氏の口から飛び出した。よく意味がわからない。私の聞きまちがいだろうか。

例えば、アイスとか。

「アイス」と「パピ子」

共通するのは、始めの2音の母音だけだ。

「黒いマスカラが、線香花火のはかなさの『ごとく滴り落ちたかと思う』と、すぐにパピ子の瞼が溶けはじめた。それから鼻が溶けはじめ、少ない鼻毛の生えている鼻腔内があらわになつた。そのうち、頬の肉もトロトロと波打ちながら地面へと滴り落ちていき、やがてパピ子の瀟洒な頬骨が露わになつた。当のパピ子自身は、まさに『ところのチーズ』を演じているかのような気分を味わつていた。職業女優の面目躍如である。」

私は、その無惨とも酸鼻ともいえる有様から、思わず目をそむけてしまつた。これは私の役割上、やつてはいけないことが、どうしても溶けはじめているパピ子の有様を直視することができなかつた。

だが、せつかくそうやって目をそらした次の地点には、同じくアロアロと溶けている3つ子の姿があつた。

まず、キュー・ティクルが死滅していた。つまり、髪の毛が一本残らず焼け縮れていたのだ。

それから、とっくの昔に顔面の皮膚は溶け落ちていて、いつもなら眼球がある場所はお留守だった。2つの濁りきつた眼球は、どこかへお出掛けしていた。という下らないことを言つてゐる間にも、3つ子は溶け続けていた。もはや、首から上の部分は、骨格標本に近づきつつある。

「いつの間にかパピ子の衣服が消失していた。披露された美しき女優の裸身は、男性のニヤンポコリンをギュルンギュルンにさせるのに十分すぎるものだつた。しかし、大きな乳房やくびれた腰まわりに感嘆する暇も与えられないまま、一瞬にしてパピ子の骨格や内臓が剥きだしになつていく。もはやパピ子自身に、明瞭な意識は存在していない。走馬灯に明かりがともるまもなく、22歳の若き女優は、死を迎えた」

しかし、死を迎えてもなお、パパ子の肉体に対する損壊は続けていた。どんどん、ますます、ジャンジャンバリバリ、止むことなく人体組織の崩壊が続いていた。

「骨。というよりも、まるで和菓子の落雁のようだつた。落雁は、ほのかに甘くて美味しい。まあそれはさておき、もつとわかりやすく言ひなれば、ラムネである。肉片がすべて剥がれ落ちてしまつた『元・ペペ子』は、まるでラムネ100%の骨格標本と化していた。ちよつとばかし削つて口に含もうものなら崩れ去つてしまつほど、いまのペペ子は脆い」

唐突に、白玉団子氏の声が途切れる。
それと同時に、ふたたび私の視界が光一色に塗り替えられた。まるで顔面に向かつて太陽を投げつけられたような気分だった。

死
死

しかし、よく考えてみれば、私が耳鳴りを起しそうは無かつた。この「き——————ん」という音は、私の耳鳴りではなく、ただ単に、私の周りで響いている大きな音に過ぎない。

なぜなら、私が耳鳴りを起こす事などありえないからで、だから、だから、

私が耳鳴りを起すことなど有り得なかつた。

それと同じように、いま現在、膨大な光で田が眩んだように感じているのも、よくよく考えてみれば、私の勘違いだつた。

こま田の前が真っ白なのは、単に私の周囲すべてに向けて強い光が発せられているからであり、それを私の肉眼がくまなく捉えている故からなのであって、ついつかり私は自身の目が眩んでしまつたのだと錯覚を起してはいた。

この私としたことが、ついその場の雰囲気に釣られて、周りの者たちと同じような反応を示してしまつとは、まさに緊張感が足りないとしか言ひようがない。

#-----

深い反省と慚愧の念をいただきながら、私は周囲の音に耳をそばだてるとともに、田を凝らした。

しかし、やきほじまで喧しかった人々の悲鳴や破碎音は、まるで聴こえてこなかつた。あの格調高い白玉団子氏の朗読も、いつこつに聴こえてくる気配がない。

びふおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

そんな中、唯一、私が感じることが出来たものせ、強く吹きぬける風の気配だつた。

ぱびゅ~ハハハハハハハハハハハハハハ

わざかに音階を変えながら私を通り過ぎてこく突風は、いつまでも止む様子がないくらいに、息が長い。

ひゅよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

依然として、私の目の前は、気のせいではあるものの、まるで田
が眩んだかのように、明るすぎる光の色で満ち満ちていた。何も見
えない。正しくは、光しか見えない。

それは、あたかも開店前の銭湯の風呂場の「ごとく、私の周りには、
誰もいなかつた。いや、しかし、よく考えてみると開店前の銭湯の
風呂場にはタイル掃除のアルバイトがいるかもしれないのに、誰も
いないことの喻えとしては、ふさわしくない。それに、たとえ開店
前の銭湯の風呂場に誰もいなかつたとしても、水を張った湯船があ
るし桶がある。これでは、何もないとは言えない。

では、遠い地の広大な砂漠地帯の「ごとく、誰も見当たらぬし、
何もない」と言ってみる。確かに広大な砂漠地帯には、誰かが居る
場所よりも、居ない場所の方がはるかに多いだろう。よって、誰も
いないかもしぬないが、やはり広大な砂漠地帯といえども、広大な
分だけの砂粒がそこには存在する。つまり、何もないことを表現す
る比喩としては、ふさわしいものではない。

視点を変えて、まだ何も注がれていないワイングラスの中身のよ
うに、「誰もいなし、何もない」よくある大きさのワイングラス
の中に誰か人間が入ることは不可能なので、誰もいない比喩として
は適切だと思われる。しかし、いやワイングラス自身があるではな
いか、という考え方についての私の意見を述べると、あくまでもワ
イングラスの中身について「何もない」と言つてゐるのだから、問
題はないだろう。だが、すこしだけ長く考えを巡らせてみれば、何
も注がれていないワイングラスの中身には、「埃」が無いとは言い切
れないということに思いが至る。

かの無限に思える宇宙空間の「ごとく、誰もいなし、何もなかつ
た」と言つてしまつたあと、すぐに私は後悔した。まず、いま現
在、この惑星の衛星軌道上の何らかの宇宙ステーション内で過酷な
任務を遂行している各国の宇宙飛行士の方々に、遺憾の意を表する
とともに、深くお詫びを申し上げたい。この私としたことが、勇敢

な彼・彼らのことをすっかり失念していた。そもそも、宇宙空間を取り上げて、何もないということの比喩に利用しようと考へが間違っていた。そもそも我らを擁する水と縁の惑星は、宇宙空間が含有する何らかの成分の何らかの化学反応によつて生じたのではないかと言われており、つまり宇宙空間を取り上げて「何もない」と言つてしまふことは、我らの発生および実在を否定することになるわけで、それは決して許されることのない誤謬だった。

すこし長い間、そんなことを考へていたにもかかわらず、まだ私には何も見えない。つまり、周囲の光は去つていなかつた。

私の肉眼で見届けられる果てまで全でが、一点の曇りもなく光によつて侵されていた。それは、つまり影のない世界であり、光と影が織り成す陰影によりカタチを保つていたはずのあらゆるモノが、その実体を失わざるをえなかつた。

つまり、いくら周りを見渡しても、誰もいないし、何も無かつた。私が何も見えないと言つてゐるのは、そういうことだつた。

そういうこと、と云つのは、どういうことかといえば、あたかも相撲部屋の横綱や大関や現役時代は小結どまりだった親方が食べ残したあとのかやんこ鍋の中身の「ごとく」、誰もいないし、何も無かつた。

食べ残されたちやんこ鍋には誰もいない。しかし、食べ残しのちやんこ鍋といえども、煮ぐずれを起こしている野菜の切れ端や、あらゆる具材によつてもたらされた滋養豊かなスープが残つてゐる。そんなものといえども、ご飯を放り込めば立派な雑炊になる。下端の弟子たちは、それを食べて厳しい修行時代を過ごすのだ。よつて、相撲部屋の幹部連中が食べ残したちやんこ鍋を取り上げて、何も無い、とは言えなかつた。

さきほどから、堂々めぐりをしている。

どうやら、私は、光によつて隈なく躊躇された現在の状況を、これ以上説明することができないかも知れない。

ところで、喉が渴いた。あくまでも気のせいなのだが、今までずっと休まずに語り続けていたのだから、気のせいといえども、やはり私の喉は渴いているのだと思う。

私のような物語の語り手といつものば、四六時中喋りっぱなしなので、いつも喉がカラカラであるような気がしている。

いま思いおこせば、あの公園に立ち寄つたのも、水飲み場の匂いに誘われてのことだつた。私は、私をずっと苦しめている気がして、いた喉の渴きを何とかしようと、さまよい続けていたのだ。

この喉の渴きのような気がするものを癒せるのであれば、公共水道とはいわず、道路の水溜りに這いつぶぱつても良いし、それが許されないのであれば、野良犬の小便をありがたく頂戴するというのも構わないが、どれだけ卑屈になろうとも、喉の渴きのような気がするものを癒すことは叶わなかつた。

いつたん喉が渴いたような気がしてしまつと、それにひられて腹がへつってきたような気もしてきた。風呂に入りたい気もする。たまには、どこかへ旅行に行きたい気もする。自家用車が欲しい気もするし、オシャレをしてみたい気もする。でも、やっぱり私は喉の渴きのような気がするものを癒したい。

とりあえず生ビール。言つてみただけ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1767b/>

虚構ヒズミラクル

2010年10月8日11時49分発行